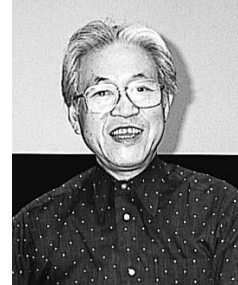


「浪人街第一話・第二話」「崇禪寺馬場」



佐藤 忠男

映画評論家
日本映画学校校長

マキノ雅弘は日本映画史上最も多作だった映画監督である。十八才で監督になり、六十年以上第一線で活躍したこと、早撮りの名人だったことなどで二百六十本ほどの作品を残している。要領が良く商売になる作品のコツをわきまえていて多くの撮影所から引っぱり尻にされて主に時代劇を作り続けたのだが、とくにやくざ映画はお手のもので、名作と呼ばれるものが少ない。商業映画の職人と目され、本人もそうであることを自負していたはずだが、若き日の一時期には芸術的にも最前衛の天才として注目され、喝采もされた。その注目された一連の作品の頂点をなすのが弱冠二十才で発表した「浪人街第一話・美しき獲物」（一九二八）である。当時、ファンや批評家たちをあっという間に驚かせたこの傑作が一部分しか残っていないのはまことに残念だが、しかしそれがこの作品のファンをわかせたクライマックスの部分だったことは不幸中の幸いだったと言わなければならない。

身分の高さをひけらかして傍若無人にふるまっている旗本の集団と、彼らに反発しながら手を出せなかった貧しい浪人たちの集団とが、浪人たちのアイドルの女性を旗本たちがなぶり殺しにしようとする事件でついに激突する。その凄惨であると同時に血わき肉おどる素晴らしい集団的な大立回りである。

この「浪人街」はシリーズ化されて「第二話・楽屋風呂」「第三話・憑かれた人々」がマキノ雅弘によって作られた。

「崇禪寺馬場」はこの評判のシリーズの途中で作られた作品で、マキノ雅弘の若き日の映画表現への情熱あふるる時期の傑作のひとつである。残念ながらこれも残っているのは完全版ではない。敵討ちは戦前の日本の時代劇でいちばん数多く主題として取りあげられている。その大多数は敵討ちを忠義や孝行の美德の発露として賞賛するものであるが、なかに一部、とくに昭和初期には敵討ちの非人道性を批判する内容のものがある。マキノ雅弘の「崇禪寺馬場」はその代表的なひとつである。単純な敵討ち物語を元にしてこれを敵持ちの男の肉体的な苦悩のドラマに脚色したのは山上伊太郎である。彼は「浪人街」シリーズの脚本家でもあり、それまで封建社会のモラルをそのまま受け継いでいた時代劇に近代的な社会観、人間観を持ち込んだ時代劇変革のパイオニアであった。彼は太平洋戦争末期に報道班員としてフィリピン戦線に従軍し、そこで亡くなっている。